
着装によって身体の自己評価はどのように変化するのか？：大学1年生女性を対象として

羽 成 隆 司

要約

本研究は18歳と19歳の大学1年生女性のみを対象とし、裸体時の身体に対する自己評価と着装時の自己評価の差（着装による自己評価の順位上昇値）を指標に用いて、身体意識の特徴を分析することを目的とした。15の身体各部位の順位上昇値について行った因子分析では、「太さや大きさ」が強く意識される部位（腹、脚、ウエスト、足、尻）、「スタイル」を表す部位（全身・上半身・下半身のプロポーション）、「上肢」（腕、肩幅、手）、「化粧・手入れ」が施される部位（毛髪、顔、肌）の4つの因子が抽出された。これらの因子で順位上昇値が最大であったのは、化粧・手入れ部位（毛髪、顔、肌）であり、化粧による加工・変容の効果が強く自覚されていることが示された。一方、太さや大きさ関連部位（腹、脚、ウエスト、足、尻）や上肢（腕、肩幅、手）などの個別の部位は、衣服による評価の上昇が小さいと意識されていると思われる。順位上昇値と、主観的健康度、ダイエット経験、被服や化粧品購入額との関連は見られなかった。

キーワード：身体意識、順位上昇値、大学1年生女性

はじめに

羽成・宮崎（2020）、羽成（2021a, b）では、若年女性18・19歳群と20・21歳群を対象に行った調査の結果から、裸体時および着装時の自身の身体に対する他者との相対的比較による魅力度の自己評価、また、その自己評価と心身の主観的健康度やダイエット経験との関連について検討してきた。それらでは、若年女性は同年代女性との相対的比較による測定においても、自身の身体を低く自己評価している者が多いこと、ただし、裸体時よりも着装時の方が相対的に高く自己評価されており、装った場合の自身に対して相対的な魅力度が高いという身体意識が持たれていることが明らかになった。これは、着装によって身体意識がポ

ジティブな方向へ変容することを示している。それでは、このような身体意識の変容にはどのような特徴があるのだろうか。羽成・宮崎（2020）、羽成（2021a, b）では、魅力度にもとづく身体部位の位置づけられ方が4つの因子に分類可能なことを因子分析によって示したが、身体意識の変容（＝自己評価の上昇）にもそのような部位による違いが見られるのであろうか。本研究では、裸体時の自己評価（100人中の順位値）と着装時の自己評価の差、すなわち、着装による自己評価の順位上昇値を指標に用いて、身体意識の特徴を探索的に分析してみることを目的とする。これまでの研究と同じく、身体各部位による違い、および、主観的健康度やダイエット経験との関連について分析した結果を報告する。なお、羽成・宮崎（2020）、羽成（2021a, b）で言及してきたように、若年女性の身体意識を分析するには、細かい年齢

差も考慮に含める必要がある。この点を考慮し、ここでは18～19歳の大学1年生のみを分析の対象としてその結果を報告する。

方法

調査対象

東海地方の女子大学で著者が担当する授業の受講生に回答を依頼した。回答者の中から、18歳および19歳の1年生のみ341名を分析対象とした。平均年齢は、18.3歳(標準偏差0.46)であった。

調査時期

調査期間は、2020年12月～2021年7月であった。

質問紙

自身の身体に対する評価については、着装時および裸体時を想定した以下の2つの質問への回答を求めた。

着装時：「よそいきの服と靴を身につけ、髪の毛もセットし、ネイルや化粧もしっかりしている状態」の自分自身および同年代の女性を想定してください。このとき、自分の体の各部位の魅力や美しさは、「同年代の女性100人中で何位くらい」だと思いますか。おおよその順位を記入してください。

裸体時：「全く何も身につけず、化粧もしていない裸体の状態」の自分自身および同年代の女性を想定してください。このとき、自分の体の各部位の魅力や美しさは、「同年代の女性100人中で何位くらい」だと思いますか。おおよその順位を記入してください。

設定した身体部位は、毛髪、顔、肌、手、腕、肩幅、胸、ウエスト、腹、足、脚、尻、全身のプロポーション、上半身のプロポーション、下半身のプロポーションの15項目であった。また、羽成・

宮崎(2020)、羽成(2021a, b)と同じく、主観的健康度の測定に日本版GHQ28(Goldberg, 中川・大坊, 1978)、やせるためのダイエット経験の有無(「現在している」「過去にしたことがある」「ない」のいずれかで回答)、年齢、身長、体重、被服と化粧品の購入それぞれに費やす1ヶ月あたりのおおよその金額について回答を求めた。

手続き

大学で著者が担当する授業の受講生に、Google Formを用いたオンラインでの回答を求めた。倫理的配慮として、質問ページの冒頭に、無記名であること、自身の身体に関連する項目があること、回答すること自体が不快感を喚起する可能性があること、回答は任意であり途中の中止も可能であること、回答の承諾・拒否・中断と当該授業の成績に関連はないことが明示されていた。参加者の匿名性を確保するためにメールアドレスの取得、アクセス対象の制限等は行わなかった。本研究計画は、前報の段階で椋山女学園大学文化情報学部の研究倫理委員会による許可を得ている。

結果と考察

着装による自己評価上昇の指標として「各部位の裸体時の順位値と着装時の順位値の差」(裸体時の順位値－着装時の順位値＝順位上昇値)を使用した。この順位上昇値全15部位の平均値が0.5未満の回答者は、着装による上昇が見られない可能性が高いとみなし、今回は分析の対象としなかった。その結果、着装上昇群のみとしての分析対象は241名となった。

身長・体重・BMI

本分析対象の身長、体重、BMIの平均値は、それぞれ157.8cm(標準偏差5.2)、49.1kg(6.06)、19.7(2.1)であった。これらは、18歳と19歳を

対象にした羽成・宮崎(2020)とほぼ同じである。また、本分析対象と同じ大学の大学生878名の身長・体重・BMIを調査した報告(三田・中島・大島・續, 2020)では、156.6~158.7cm、49.5~53.0kg、20.1~21.3となっており、これらに比べるとやや低体重と思われる。これには、本調査が1年生のみを分析対象としていることが関係しているのかもしれない。分析対象のBMIの分布を表1に示した。「やせ」が30.2%、「普通」が68.8%であり、ほとんどの回答者が「やせ」または「普通」の範囲に含まれていた。身長、体重の平均値はこれまでの調査と同程度であるが、羽成・宮崎(2020)では「やせ」が23.1%であったことに比べると、これより多い。本研究の分析対象も、瘦身体型が多いことが確認された。

各身体部位に対する自己評価上昇の特徴

順位上昇値の平均を表2に示した。毛髪、顔、肌は上昇値が比較的大きく、肩幅、胸、尻は小さい。その他の部位は、これらの中間であるように思われる。分散分析と多重比較を行ったところ、概ねそのような結果であった。

全15部位の順位上昇値について因子分析を行った。なお、本研究は探索的な試みであるため、因子分析はすべて主因子法を用いた。固有値から判断し4因子を採用した(固有値は、4.30、1.71、1.57、1.37)。「胸」は共通性が低かったこと、複数の因子に同程度の負荷量が見られたこと、それらは0.3程度と低かったため、「胸」を除外した14部位についてプロマックス回転で因子分析を行ったところ、14の身体部位すべての因子負荷量は0.45以上を示した。第1因子は、腹、脚、ウエスト、足、尻、第2因子は、全身・上半身・下半身のプロポーション、第3因子は、腕、肩幅、手、第4因子は、毛髪・顔・肌に高い負荷量が示された。第1因子は、一般に女性にとっては小さい・細いことが望ましいとされ、「太さや大きさ」が強く意識される部位、第2因子は「スタイル」を表す

部位、第3因子は「上肢」、第4因子は、その表面に意識が向けられ、「化粧・手入れ」が施される部位と位置づけられよう。ただし、クロンバックの α 係数は第2因子を除いて0.8以下であり、やや信頼性に問題が認められた(表3)。

これら4因子それぞれに含まれる部位の順位上昇値の平均を分析対象ごとに算出した。全体の平均は、第1因子(太さ・大きさ関連部位:腹、脚、ウエスト、足、尻)4.87(標準偏差8.8)、第2因子(スタイル関連部位:上半身、全身、下半身)8.32(10.09)、第3因子(上肢:腕、肩幅、手)5.54(9.58)、第4因子(化粧・手入れ部位:毛髪、顔、肌)12.33(12.08)であった。これらについて分散分析を行ったところ、部位間の差が有意であり($F(3, 720) = 35.38, p < .01$)、多重比較(Bonferroni)の結果、第4因子 > 第2因子 > 第1および第3因子、の順であった。すなわち、順位上昇値は、化粧・手入れ部位(毛髪、顔、肌)、スタイル関連部位(上半身、全身、下半身)、太さ・大きさ関連部位(腹、脚、ウエスト、足、尻)および上肢(腕、肩幅、手)の順で大きかった。着装による自己評価の上昇が比較強く意識されるのは、メイクの対象となる「毛髪、顔、肌」、次いで、スタイル全体ということがわかる。これらに対して、第3因子や第1因子に含まれる身体の個別の各部位は、衣服による評価の上昇が小さいと意識されていると考えられる。また、羽成・宮崎(2020)、羽成(2021a, b)で明らかのように、第1因子の腹、脚、ウエスト、足、尻は着装の有無にかかわらず他の部位より自己評価自体が低い部位である。もともとが評価の低い部位であることが、着装による変容を自覚させにくいことにつながっているのかもしれない。

表1 BMIの分布

BMI	分類	人数	比率 (%)
18.5未満	やせ	65	30.2
18.5～25	普通	148	68.8
25～30	肥満度1	2	0.9
30～35	肥満度2	0	0
35～40	肥満度3	0	0
40以上	肥満度4	0	0
体重無回答		(26)	

表2 着装による順位上昇値

	平均値	標準偏差	N
毛髪	11.3	(16.9)	237
顔	14.3	(15.2)	237
肌	11.8	(15.3)	237
手	6.7	(14.3)	237
腕	6.2	(12.6)	237
肩幅	3.8	(10.6)	237
胸	4.3	(11.6)	237
ウエスト	5.1	(12.1)	237
腹	4.9	(11.7)	237
足	5.6	(12.5)	237
脚	4.9	(12.0)	237
尻	4.3	(11.7)	237
全身	9.3	(13.2)	237
上半身	8.2	(11.4)	237
下半身	7.5	(10.7)	237

表3 各部位における順位上昇値の因子分析結果

身体部位	I	II	III	IV
第1因子： 太さ・大きさ関連部位				
腹	.782	.019	-.083	.016
脚	.739	-.155	.079	.013
ウエスト	.695	.037	.038	-.068
足	.600	.074	.069	.014
尻	.454	.045	-.024	.005
第2因子： スタイル関連部位				
上半身	-.077	.876	.031	-.103
全身	-.011	.795	-.002	.019
下半身	.178	.655	-.063	.127
第3因子：上肢				
腕	.019	.126	.627	-.044
肩幅	.051	-.107	.596	-.011
手	-.004	-.007	.588	.042
第4因子： 化粧・手入れ部位				
毛髪	.029	-.061	-.074	.702
顔	.018	.023	-.064	.667
肌	-.104	.029	.262	.510
	α	α	α	α
	=.792	=.823	=.633	=.650
因子相関行列	I	II	III	IV
I		.427	.368	.454
II			.231	.289
III				.188

主観的健康度と、身長・体重・BMI、順位上昇値との関連

羽成・宮崎 (2020)、羽成 (2021a, b) と同じく、日本版GHQ28の合計得点5点以下の回答者を健康度高群、14点以上を健康度低群とし、その間の6～13点を健康度中群とした。各群の人数は、高群109人 (45.2%)、中群88人 (36.5%)、低群44人 (18.3%) であった。身長・体重・BMIそれぞれについて健康度の効果が見られるか分散分析を行ったところ、身長のみ有意で、健康度低群が中群より身長が高かった(表4)。羽成・宮崎(2020)

では、身長で有意、体重で有意傾向が認められ、健康度低群は相対的に低身長でやや低体重であったが、ここではそのような特徴は見られなかった。各部位の順位上昇値に健康度の効果が見られるかについて、各部位、および、4つの因子ごとに分散分析を行ったところ、下半身のプロポーシオンで有意な傾向が見られたのみであった(表5,6)。健康度と順位上昇値の間に明確な関連は見出されなかった。

表4 各健康度における身長・体重・BMIの平均値

() は標準偏差

	健康度			F		多重比較 (Bonferroni法)
	高	中	低			
身長 (cm)	158.2 (5.6)	156.6 (5.1)	159.2 (4.1)	4.24	*	中<低*
体重 (kg)	49.1 (6.4)	48.4 (5.8)	50.2 (5.7)	1.15	<i>n. s.</i>	
BMI	19.2 (2.3)	19.3 (2.1)	19.2 (1.9)	.11	<i>n. s.</i>	

* $p < .05$

表5 各健康度における身体各部位の順位上昇値

() は標準偏差

	健康度			F	
	高	中	低		
毛髪	12.4 (15.6)	11.0 (18.4)	8.9 (16.6)	.68	<i>n. s.</i>
顔	14.2 (13.8)	14.6 (17.1)	12.9 (14.9)	.17	<i>n. s.</i>
肌	11.3 (13.5)	12.8 (17.9)	10.1 (13.4)	.52	<i>n. s.</i>
手	5.7 (13.0)	6.2 (12.8)	9.9 (19.0)	1.48	<i>n. s.</i>
腕	4.6 (11.4)	7.3 (13.8)	8.5 (13.6)	1.88	<i>n. s.</i>
肩幅	2.7 (10.8)	4.3 (9.9)	5.3 (11.1)	1.06	<i>n. s.</i>
胸	4.7 (13.2)	3.3 (11.0)	4.1 (9.5)	.36	<i>n. s.</i>
ウエスト	3.6 (10.2)	5.8 (15.0)	7.1 (9.1)	1.61	<i>n. s.</i>
腹	3.7 (9.0)	6.6 (15.1)	3.6 (9.0)	1.78	<i>n. s.</i>
足	5.1 (10.9)	5.7 (14.0)	6.4 (13.2)	.17	<i>n. s.</i>
脚	3.8 (8.9)	5.7 (14.5)	5.7 (13.1)	.76	<i>n. s.</i>
尻	3.9 (10.4)	5.2 (13.9)	2.8 (9.2)	.71	<i>n. s.</i>
全身	8.3 (10.7)	11.5 (16.1)	7.2 (11.8)	2.11	<i>n. s.</i>
上半身	7.5 (9.5)	9.6 (12.8)	7.7 (12.4)	.97	<i>n. s.</i>
下半身	7.6 (9.5)	8.8 (12.5)	4.3 (8.4)	2.73	†

† $p < .10$

表6 各健康度における4因子ごとの順位上昇値

() は標準偏差

	健康度			F	
	高	中	低		
第1因子：太さ・大きさ関連部位	4.0	5.8	5.1	1.02	<i>n. s.</i>
腹・脚・ウエスト・足・尻	(6.2)	(11.8)	(7.2)		
第2因子：スタイル関連部位	7.8	10.0	6.4	2.22	<i>n. s.</i>
上半身・全身・下半身	(8.5)	(12.1)	(8.9)		
第3因子：上肢	4.3	5.9	7.9	2.32	<i>n. s.</i>
腕・肩・手	(8.8)	(9.6)	(11.1)		
第4因子：化粧・手入れ部位	12.6	12.8	10.7	.52	<i>n. s.</i>
毛髪・顔・肌	(10.5)	(14.7)	(9.9)		

ダイエット経験、被服・化粧品の購入金額

やせるためのダイエット経験の合計は71.8%であった（現在している：31.1%、過去にしたことがある：40.7%）。これは、羽成・宮崎（2020）、羽成（2021a, b）や、女子大学生を対象に行われた他の研究（森・山本・倉賀野, 2012; 前川, 2005; 荻布・蓮井・細田・山本, 2006）と同程度の結果である。ダイエット経験別の身長・体重・BMIについて分散分析を行った結果、羽成・宮崎（2020）と同じく体重とBMIが有意であり、現在ダイエットをしている者が、過去の経験者や経験がない者より、体重とBMIの数値が大きかった（表7）。

各部位の順位上昇値にダイエット経験の効果が見られるかについて、各部位、および、4つの因子ごとに分散分析を行ったところ、上半身のプロ

ーションで有意（現在ダイエット中の者の順位上昇値が最大）、腕で有意な傾向が見られたのみであった（表8、9）。ダイエット経験と順位上昇値の間に明確な関連は見出されなかった。

被服や化粧品の購入額にダイエット経験の効果が見られるかについて分散分析を行ったところ、いずれについても有意差は認められなかった（表10）。羽成・宮崎（2020）では、現在ダイエット中である者の金額が最大であり、ダイエット行動と装いへの積極性の関連が示されたが、今回はそのような特徴は見られなかった。また、健康度と被服や化粧品の購入額、ダイエット経験別のGHQ合計得点について行った分散分析いずれにおいても、有意差は認められなかった。ダイエット経験、健康度、被服・化粧品の購入金額の間に

表7 ダイエット経験による身長・体重・BMIの平均値

() は標準偏差

	ダイエット経験			F		多重比較 (Bonferroni法)
	現在している	過去にした	経験なし			
身長 (cm)	158.8	157.5	157.1	2.03	<i>n. s.</i>	
	(5.1)	(5.2)	(5.4)			
体重 (kg)	52.1	48.2	47.2	13.44	**	現在>過去*
	(6.3)	(5.5)	(5.5)			現在>経験なし*
BMI	20.1	19.0	18.6	9.18	**	現在>過去*
	(2.2)	(1.8)	(2.3)			現在>経験なし*

* $p < .05$, ** $p < .01$

表8 ダイエット経験による身体各部位の順位上昇値

() は標準偏差

	ダイエット経験			F		多重比較 (Bonferroni法)
	現在している	過去にした	経験なし			
毛髪	10.1 (15.9)	12.5 (19.3)	10.7 (13.7)	.50	<i>n. s.</i>	
顔	14.1 (16.1)	15.7 (16.6)	11.8 (11.7)	1.32	<i>n. s.</i>	
肌	14.4 (16.0)	11.2 (15.8)	9.2 (13.0)	2.24	<i>n. s.</i>	
手	6.2 (13.6)	6.8 (14.2)	7.0 (15.1)	.06	<i>n. s.</i>	
腕	7.9 (15.8)	3.9 (10.1)	8.0 (12.2)	2.94	†	
肩幅	4.3 (11.6)	3.5 (9.2)	3.5 (11.3)	.86	<i>n. s.</i>	
胸	5.2 (13.0)	3.3 (9.5)	3.9 (13.3)	.55	<i>n. s.</i>	
ウエスト	4.4 (11.3)	4.2 (13.4)	7.0 (10.7)	1.25	<i>n. s.</i>	
腹	3.1 (10.0)	5.2 (13.4)	6.0 (10.5)	1.26	<i>n. s.</i>	
足	4.8 (10.2)	5.5 (14.7)	6.5 (11.5)	.34	<i>n. s.</i>	
脚	2.9 (10.1)	5.8 (12.2)	5.6 (13.3)	1.47	<i>n. s.</i>	
尻	3.8 (12.7)	3.5 (12.0)	5.7 (9.5)	.77	<i>n. s.</i>	
全身	10.3 (12.7)	8.5 (13.3)	9.2 (13.5)	.41	<i>n. s.</i>	
上半身	11.6 (12.5)	6.9 (10.7)	6.8 (10.3)	4.62	*	現在>過去にした* 現在>経験なし*
下半身	7.7 (10.8)	7.6 (10.9)	6.7 (10.0)	.20	<i>n. s.</i>	

† $p < .10$, * $p < .05$

表9 ダイエット経験による4因子ごとの順位上昇値

() は標準偏差

	ダイエット経験			F	
	現在している	過去にした	経験なし		
第1因子：太さ・大きさ関連部位 腹・脚・ウエスト・足・尻	3.78 (7.60)	4.81 (10.24)	6.16 (7.78)	1.30	<i>n. s.</i>
第2因子：スタイル関連部位 上半身・全身・下半身	9.89 (10.25)	7.64 (10.53)	7.56 (9.18)	1.33	<i>n. s.</i>
第3因子：上肢 腕・肩・手	6.11 (10.06)	4.68 (8.85)	6.16 (10.08)	.66	<i>n. s.</i>
第4因子：化粧・手入れ部位 毛髪・顔・肌	12.88 (10.86)	13.13 (14.22)	10.56 (9.77)	1.02	<i>n. s.</i>

表10 ダイエット経験による1ヶ月あたりの被服と化粧品購入平均額（円）

（ ）は標準偏差

	ダイエット経験			F	
	現在している	過去にした	経験なし		
衣服	10,691 (8,437)	9,739 (8,731)	9,342 (8,943)	.45	<i>n. s.</i>
化粧品	3,887 (3,349)	2,999 (2,929)	3,031 (3,194)	1.93	<i>n. s.</i>
衣服、化粧品合計	14,633 (10,274)	12,738 (10,608)	12,374 (11,250)	.92	<i>n. s.</i>

は明確な関連は見出せなかった。

結 論

本研究は、18歳と19歳の大学1年生女性のみを対象とし、着装による自己評価の順位上昇値を指標に用いた分析を行った。これまでの研究と同じく、身体各部位による違い、主観的健康度、ダイエット経験との関連についても確認した。

全15部位の順位上昇値について行った因子分析では、4つの因子が抽出された。すなわち、一般に女性にとっては小さい・細いことが望ましいとされ、「太さや大きさ」が強く意識される部位（腹、脚、ウエスト、足、尻）、「スタイル」を表す部位（全身・上半身・下半身のプロポーション）、「上肢」（腕、肩幅、手）、その表面に意識が向けられ、「化粧・手入れ」が施される部位（毛髪、顔、肌）である。これらのうち、各因子に含まれる部位の順位上昇値の平均が最大であったのは、化粧・手入れ部位（毛髪、顔、肌）であった。化粧（＝メイク・アップ）による加工・変容の効果は、衣服による変容より強く自覚されていると言えよう。一方、太さや大きさ関連部位（腹、脚、ウエスト、足、尻）や上肢（腕、肩幅、手）などの個別の部位は、衣服による評価の上昇が小さいと意識されていると思われる。また、これまでの調査で裸体時も着装時も評価が低いことが確認されて

いる、腹、脚、ウエスト、足、尻は、ただ他の部位と比べて評価が低いというだけでなく、着装による加工・変容が施しにくい部位であると意識されているのかもしれない。なお、因子分析では「胸」が他の部位と同じ因子に含まれず、本研究でも「胸」が他の部位とは異なる独自の位置づけがなされている可能性が示唆された。

順位上昇値と、主観的健康度、ダイエット経験、被服や化粧品購入額との関連は見られなかった。羽成・宮崎（2020）、羽成（2021a, b）では、とくに主観的健康度と身体部位への自己評価との間にいくつかの関連が見られたが、被服や化粧による自己評価の上昇には、主観的健康度の影響は見出せなかった。身体部位への自己評価と、被服や化粧による自己評価の上昇は、いずれも身体意識に関わるものとは言え、異なる側面を反映していると推測される。

今後は、大学2年生以上の年齢群も含めて年齢の効果の詳細を確認すること、順位上昇値によって回答者を分類し、被服や化粧による自己評価の上昇が著しいグループとそうでないグループの比較を行うことなどが考えられる。

引用文献

- Goldberg, D. P. 著, 中川泰彬・大坊郁夫訳 (1978) 日本語版 GHQ28 日本文化科学社
 羽成隆司・宮崎沙来 (2020) 18歳、19歳女性における自身の身体に対する評価、主観的健康度、ダイエット経験の関連 椋山女学園大学文化情報学部紀要第19巻,

47-56.

- 羽成隆司 (2021a) 20歳、21歳女性における自身の身体に対する評価、主観的健康度、ダイエット経験の関連 椋山女学園大学文化情報学部紀要第20巻, 91-98.
- 羽成隆司 (2021b) 若年女性における自身の身体に対する相対的魅力の自己評価 日本衣服学会誌, 64(2), 51-58.
- 前川浩子 (2005) 青年期女子の体重・体型へのこだわりに影響を及ぼす要因 ——親の養育行動と社会的要因からの検討 パーソナリティ研究, 13, 129-142.
- 三田有紀子・中島正夫・大島千穂・續順子 (2020) 女子大学生の痩せ志向について ——第4報:学部間比較—— 椋山女学園大学研究論集第51号 (自然科学編), 1-12.
- 森由紀・山本存・倉賀野妙子 (2012) 女子大生のおしゃれ意識がもたらす瘦身願望と健康状況 ——食行動・運動習慣との関連において—— 日本家政学会誌, 63, 309-318.
- 荻布智恵・蓮井理沙・細田明美・山本由喜子 (2006) 若年女性のやせ願望の現状と体型に対する自覚及びダイエット経験 生活科学研究誌, 5, 25-33.

本研究は、2021年度椋山女学園大学学園研究費Bの助成を受けました。

はなり・たかし / 文化情報学部教授
E-mail : hanari@sugiyama-u.ac.jp

